

# 出でよ、現代の安吾



## 野田秀樹

### 第一回安吾賞受賞

2006年

### 安吾賞創設

新潟市ゆかりの作家である坂口

安吾は、文学をはじめ多くの分

野において何事にも一生懸命に

挑み続ける人であった。挑戦者を応援する都市風土を育

み全国に発信するため、安吾の精神を具現しさまざま

な分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人

に喝を与えた個人または団体を表彰する「安吾賞」。坂

口安吾生誕百年である本年、記念すべき第一回の安吾

賞受賞者として、演劇人『野田秀樹』氏を選出した。



### 第一回「安吾賞」の選考を終えて

私のような人間が選考委員長を務める「安吾賞」は、文学賞ではあり得ない。

篠田新潟市長によると「安吾的生き方をした人物を顕彰したい」とのことだから、「生き様賞」とでも言うべきだろうか。文筆の人安吾は、好んで時の通説や権威に挑戦した。もっとも重要な点は、多くの人々に共感を引き起こさせて通説や権威につきものの「奢り」「やうさんくささ」に一撃をくらわし、時代に新しい風を吹き込んでくれたことだ。「安吾賞」は、国籍・職業・年齢：を問わず、正にそういう生き様を示す人物に贈られる賞である。

安吾賞選考委員長 野田一夫

# 安吾賞 第1回

# ANGO Awards

坂口安吾生誕百年 2006年10月20日

## 野田秀樹

ネイションもステイトもジェンダーも越える  
墮ちて墮ちてそして甦生する男

安吾賞創設の宣言文に、『権威におもねらない、本質を提示する、反骨と飽くなき挑戦者魂を發揮し、現代の世相に「喝」を入れ、日本に元気と勇気を与えた人』とある。選考委員一同が頭を抱えたというこの難しい賞を演劇人野田秀樹氏が射止めた。

劇団夢の遊眠社で80年代の若者に絶大な共感を得たが、92年人気絶頂の時期に突然劇団を解散、名声にくると背を向けて演劇の本場英国に留学してしまう。帰国後、既成の手法にとらわれず「野田流」とも言える演劇手法でシリアスなテーマに果敢に挑戦し日本の演劇シーンをリードしてきたが、03年の英国公演 (RED DEMON) では酷評される。しかし、その「痛手」がさらに野田

演劇を深めることになった。本年、再挑戦した英国公演 (THE BEE) が成功を収め、新聞雑誌を賑わせ日本に明るいニュースをもたらしたのだ。奇しくもこの安吾賞選考の時期にあたっている。

55年、坂口安吾が急逝した10ヶ月後に生まれ自らを安吾の生まれ変わりと言ふ野田秀樹氏が、記念すべき第1回・安吾賞を獲得したことを、天国の安吾も喜んでいるに違いない。



第1回安吾賞受賞者 野田秀樹 (作家・演出家・俳優) 略歴	経歴
1955	12月20日長崎県に生まれる(崎戸島)
1971	東京教育大学附属駒場高等学校入学
1972	処女戯曲「アイと死をみつめて」自作自演
1975	東京大学入学・演劇研究会に所属
1976	劇団夢の遊眠社結成
1983	「野獣降臨」第27回岸田國土戯曲賞受賞
1986	「野田秀樹の十二夜」
1987	「野獣降臨」エディンバラ国際芸術祭参加
1988	「彗星の使者」第1回ニューヨーク国際芸術祭参加
1989	「野田版 国姓爺合戦」
1990	「半神」エディンバラ国際芸術祭参加
1992	「野田秀樹の真夏の夜の夢」 劇団夢の遊眠社解散 全43回公演 1,205ステージ 文化庁芸術家在外研修制度の留学生として 1年間英国滞在
1993	企画製作会社「NODA・MAP」設立
1994	「キル」・「虎 野田秀樹の国姓爺合戦」
1995	「贖作・罪と罰」・「し」
1996	「TABOO」・「赤鬼」
1997	「赤鬼」日・タイ現代演劇共同制作公演
1998	「ローリングストーン」 「赤鬼」バンコク公演・「Right Eye」
1999	「半神」・「パンドラの鐘」
2000	「カノン」・「農業少女」
2001	「2001人芝居(にせんひとりばい)」 「贖作・桜の森の満開の下」 「八月納涼歌舞伎 野田版 研辰の討たれ」
2002	「売り言葉」
2003	「RED DEMON」英国公演・「オイル」 「八月納涼歌舞伎 野田版 鼠小僧」 「透明人間の蒸気」・オペラ「マクベス」
2004	「赤鬼」ロンドン・タイ・日本3バージョン連続上演 「走れメルス」
2005	「野田版 研辰の討たれ」(再演) 「赤鬼」韓国バージョン 「贖作・罪と罰」
2006	「THE BEE」英国公演 「ロプ」(公演予定 '06年12月~'07年1月)

## 坂口安吾年譜



**生誕** 明治39年(1906)10月20日、新潟市に生まれる。学校に馴染めず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで思索した。荒漠たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

**余は偉大なる落伍者となつていつの日か歴史の中によみがえるであろう** 大正11年、落第が決定的となり東京の豊山中学校3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となつていつの日か歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。卒業後、下北沢の分教場の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

**求道者、安吾** 大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続け神

経衰弱に陥ったが、それを梵語、パーリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

**文壇デビュー** 昭和6年、『木枯の酒倉から』、『ふるさとに寄する讃歌』、『風博士』を発表、文壇デビューを果たす。失恋の痛手を克服する決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返して自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』(S15)、『木々の精、谷の精』(S15)などの新境地をひらく。

**小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に見いだす必然の美** 昭和17年、国粹主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を嚙呑みにすることの欺瞞を指摘した。

**墮ち切るにより真実の救いを発見せよ** 昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本質

を洞察し、4月『墮落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『墮落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の禪を洗う女』を発表。

**戦う安吾** 昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐって『負けケレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり戦い抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』(S27)発表。

**急逝** 昭和30年(1955)2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48歳。

## 授賞式のご案内

- にいがた市 -  
坂口安吾のふるさと  
新潟市にも  
是非お運びください

## 第1回安吾賞授賞式

2006年10月15日(日)

新潟市民芸術文化会館 りゅーとぴあ <入場無料>

※詳しくは事務局までお問い合わせくださいませ。

【安吾賞事務局】新潟市文化振興課 TEL.025-226-2153

